

Title	ハイデガーの時間論とそのテキスト解釈の歴史：先駆的なものの二重の構成
Author(s)	入谷, 秀一
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45710
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	入谷 秀一
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19007 号
学位授与年月日	平成 16 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	ハイデガーの時間論とそのテキスト解釈の歴史—先駆的なものの二重の構成—
論文審査委員	(主査) 教授 入江 幸男 (副査) 教授 溝口 宏平 助教授 望月 太郎

論文内容の要旨

本論文は、前期から後期までの M・ハイデガーの時間論の全体を研究対象とする。全体は序と五つの章からなり、400 字詰め原稿用紙に換算して約 540 枚となる。

序では、ハイデガーにおける時間論の解明のためには、彼のテキスト解釈の歴史全体を考慮することが必要不可欠であることを指摘する。

第一章「ハイデガーの時間論の起源と展開——アリストテレスから出発して」では、前期ハイデガーの主要なテーマである現存在分析論の背後に、アリストテレスの実体(ウーシア)論の影響があることを指摘する。「実体」とは、一方で個々の知覚可能な個別的な「存在者」を表し、他方でこの存在者を普遍的に定義する「形相」を表す。個別的な存在者は、「我々にとり先なるもの」であり、形相は「本性上先なるもの」である。この「先なるもの」の二義性を、ハイデガーは、「存在者/存在」「近さ/遠さ」「現実態/可能態」「始め/終わり」などの対項として継承する。

第二章「有限性——『存在と時間』における死の遠近法」では、こうしたアリストテレスの道具立ての継承が、『存在と時間』において「現存在は、存在者的には最も身近であるが、存在論的には最も遠い存在」と規定する点にも如実に現れてくること、また「テロス(終わり)=目的」に到達していることに事柄の本質を求めるアリストテレス的な時間理解の伝統が、現存在を常に自己自身の「死(終わり)」に関わる存在と規定する場合にも反映していることを論証する。

第三章「分裂する時間論の地平——ニーチェへの接近と離反」では、1930 年代の一連のニーチェ講義において、ハイデガーがニーチェをプラトン以来の形而上学の完成者として解釈するのだが、その場合にも、アリストテレスの時間論がニーチェに投影されていることを示す。

第四章「差異の横断——ハイデガーのヘルダーリン論の時間的解釈」では、1930 年代の中盤を境にして、ハイデガーが、一方でプラトンからニーチェにいたる形而上学史の完結を批判的に述べつつ、他方で「他の歴史の始まり」あるいは、新しい時間論をヘルダーリンの作品の中に見出すようになること、およびその時間論の難点を論じる。

第五章「総括と展望」では、まずこのヘルダーリン解釈にも、アリストテレスの「先なるもの」の二義性が反映していることを指摘する。そして、全体の議論を振り返り、ハイデガーとアリストテレス、ニーチェ、ヘルダーリンの思想的関係を改めて整理し、その時間論の意義と限界について総括する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ハイデガーの思想展開を、時間論を軸にして、前期から後期に渡って扱ったものであり、非常に多くの参考文献を渉猟した上で、綿密なテキスト分析に基づいて、ハイデガーの時間論の展開過程に明確な見取り図を与える労作である。従来、彼の時間論は、主著である『存在と時間』（1927）に限定して論じられることが多かったが、本論文は後年の『時間と存在』（1962）に到るまでの時間論の変化の道筋を論じたものである。とりわけ本論文が評価されるべき点は、『存在と時間』から「ニーチェ講義」への展開の中にも、また「ヘルダーリン講義」で登場する新しい時間概念においても、つねに彼のアリストテレス解釈が大きな影響を与えていることを綿密に論証したことである。アリストテレスの影響については、これまで指摘されたこともあるが、本論文は、現在刊行中の全集において近年出版されたアリストテレスに関する「講義」や「ナトルブ報告」に基づいて、文献的に明確に論証し、影響関係について詳細な議論を可能にした。その意味で、本論文は、今後のハイデガーの時間論研究に確実に貢献するものである。

本論文の問題点をあげるとすれば、文章が難解であるために論旨が読み取りにくい箇所がいくつか見られるということがある。また、本論文で示した時間論の展開についての全体的な見取り図を、ハイデガー思想全体の展開のなかに位置づける議論があれば、立論はさらに奥行きのあるものになった、と思われる。しかしこれらは、本論文がハイデガー時間論の展開の全体像を捉えて分析した価値と意義を損なうものではない。よって審査の結果、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。